法蔵菩薩

――曾我量深先生の生涯を貫くもの――

伊東慧明

お招きいただきまして、曾我量深先生の二十三回忌ご法要にお参りさせていただきました。この機会にお話するようにということで、いまこの壇に立つことになりました。

この壇上正面に飾ってあります肖像画、これは大谷大学の学長の頃のもので、お描きくださったのは高光一也画伯でございます。松原祐善先生を中心に全国の有志の方々からご懇志をいただいて寄贈いたしました。

先生は、昭和三十六年（一九六一）八十七歳のとき学長にご就任くださり、それから二期六年、九十三歳までお勤めくださいましたが、その頃の大学は内外騒然としておりまして、先生には大変ご苦労をおかけ申したのでございます。

ところでこの画は、学長ご就任のお祝いにということで発起されましたが、八十八歳・米寿の記念祝賀会の時にはたしかまだ完成していません。そしてそのすぐ後には満九十歳の頌寿記念のお祝いが続きます。そこで結局、それらのお祝いの記念としてお贈りさせていただくことになった、と、いま往時のことを思い出しております。あれからもう三十年になるのでございますが、久々に肖像画の先生にお会いさせていただいて、懐かしく、一言申しあげさせていただきました。①

さて、ただいまは寺川俊昭先生から「曾我量深先生における法蔵菩薩の探究」というご講題で懇ろなお話を承りました。私の講題もまた「法蔵菩薩」でございます。これは寺川先生と予めご相談したのではありません。鸞音忌実行委員会のみなさんから私に与えられましたもので、偶々一緒になったのであります。

曾我量深先生を語るということになりますと、有縁の先輩がたくさんいらっしゃるのでありますから、私は、再三お断り申しました。しかし結局、私が選ばれることになりましたのは、今年の一月、私の書かせていただいた先生の小伝が出版されたということにもよるのでございましょう。それは『浄土仏教の思想』の第十五巻に、鈴木大拙、曾我量深、金子大榮の三先生が収められることになり、その曾我先生を私が担当させていただいたのです。

そこで、そもそも「曾我量深」先生はどういうお人であるかといえば、先生は、如来の大悲に生きる原始の本能人である、かつまた先生は、如来の智慧を体現する真智の自然人である。そういうことで私はその小伝に「真智の自然人」というサブタイトルをつけさせていただきました。ところが、出講依頼のために来られた実行委員会の学生さんが、「真智の自然人」とはどういうことかとお尋ねになりました。それで私は「それは法蔵菩薩のことでしょう」とお答えしました。そういういきさつもありまして講題は「法蔵菩薩」ということになったようであります。

さきほどの寺川先生のお話にもありました曾我先生の『法蔵菩薩』(『選』一二)ですが、これは当時、真宗大谷派教学研究所東京分室で、年に二回ほど先生をお招きして、教学講座が行われていました。そこで八十八歳・米寿の時には、東京のみなさんが主催されて、「法蔵菩薩」という講題でお話しくださいとお願いされまして、東京大谷会館で記念の講演会が催されました、その時の筆録であります。

そこでまずその『法蔵菩薩』を拝読いたしまして、心に残るお言葉のいくつかを綴って申しあげます。

法蔵菩薩は阿頼耶識である。

阿頼耶識は、中国の言葉に翻訳して蔵識(ぞうしき)という。蔵識とは法蔵識である。一切万法の蔵(くら)である。

阿頼耶識は、ほんとうのわれである、純粋のわれである、真の我、真我である。

私どもは、みな一つの阿頼耶識である、一人一人が阿頼耶識である。

曾て、ある学生さんが「阿頼耶識がよくわかりません」とお尋ねしたら、先生は、その学生さんの肩を叩いて、「あなた、あなたが阿頼耶識ですよ」とおっしゃった。先生は、そういう教え方、そういう説き方もなさった。

阿頼耶識すなわち真の我は、純粋な自己である。この純粋な自己は、相対有限である。絶対無限の如来に対応して自己は相対有限である。「清沢満之先生が〝自己とは何ぞや〟と言われるが、あの自己である。

この「阿頼耶識は法蔵菩薩である」というご己証について、金子大榮先生は「先生の教説を聞く者にとっては否認することのできぬものではあるが、それにも拘わらず追随のできぬものである。そこには先生独自の唯識教学がある」、これは全く独得のもの、古今独歩のもののように思われる、と言っておられます（『選・月』1、取意）

これに関しまして忘れることのできない大切な論著は、あの問題の「如来表現の範疇としての三心観」（『選』五）であります。これは大正十五年（一九二六）に当時の真宗学研究所でお話されたものの速記録ですが、昭和の初めこれが出版されますと――、これだけが原因ではなかったのでしょうが、東本願寺の侍董寮（じとうりょう）から、その内容が宗義に反するとされて大学を辞任されることになったのであります。

実はこれに先立って先生は「法蔵菩薩影現（ようげん）の歴程としての三願」という論文（大正七年。『選』三）で、法蔵菩薩と阿頼耶識の関係を論じておられます。つまり『大無量寿経』の四十八願において法蔵菩薩は「十方衆生よ」と三度呼びかけられた。その十八、十九、二十の三願と阿頼耶識の三位とは深い関係を有（も）つものである。

阿頼耶識の三位は根本識の自覚の道程を示し、法蔵菩薩の上の三願は現実自我影現の三位を顕示するものである。

空想的人生から真実人生を創建するものである。②

十八、十九、二十の三願は法蔵菩薩影現の過程にして、すなわち我等人間の救済の歴史であり、自覚の歴程であ

る。

そして先生はこれに続く論文、「五劫の思惟を背景として」、「復活教と往生教」（以上『選』三）、「如来、我を救ふや」（『選』四）などによって、その後の思索の内景をお示しくださっておりますが、法蔵菩薩は阿頼耶識であるという眼をもって先生の論著を拝読いたしますと、それを感得なさった原体験はすでに早く、その思想の源流は、大正後期の東京時代から初期の越後時代へ、そしてさらに明治期の東京時代へと遡ることができるようであります。

ところでこの三願と三位の関係につきまして、金子先生宛のお手紙に――。この手紙は『両眼人』という書簡集に収められております。曾我先生から金子先生宛の二百十一通もの封書や葉書を、金子先生が大切に保管していてくださいました。それを廣瀬杲先生が、大谷大学の真宗総合研究所のご協力のもとに編集して、一冊の単行本として出版してくださいました。

これは金子先生へのお手紙ですから、これを論集・選集などと合せて読ませていただきますと、曾我先生の思想やお人柄、あるいは日常のご生活まで窺わせていただくことができる、まことに貴重な資料であります。いや、単なる資料ではありません、先生を敬慕いたします者にとっては、書簡形式の尊い聖語集であります。

その大正十年（一九二一）のお手紙に、次のようにあります。

私は頼耶考察に付てその三位と云ふことが根本であると思ふ　何故に古来の学者がそれを考へなかったこと（ママ）を疑ふ　私は已に数年前に此を法蔵菩薩の三願に配して考へました（注。「法蔵菩薩影現の歴程としての三願」）此を心理的自然的論理的と命名して置きます　先づ本願の問題はやはりこんな所から考へねばならぬと思ひます

さて、その「如来表現の範疇としての三心観」におきましては、第十八願の「至心・信楽・欲生」の三心と、阿頼耶識の「自相・果相・因相」の三相との関係を明らかにすることによって、法蔵菩薩は阿頼耶識であるとお示しくださってあります。

法蔵菩薩とは第八阿頼耶識の内容である、と同時に、阿頼耶識が法蔵菩薩の内容である。だから吾々は阿頼耶識として法蔵菩薩を意識するのである。

まず阿頼耶識は法蔵菩薩である。随って「法蔵菩薩は純真なる宗教的体験である」。その法蔵菩薩が、至心信楽欲生の三心の誓いを発したもうたのである。この三心を阿頼耶の三相の上に求めると、

自相（阿頼耶識）――信楽
果相（異熟識）――至心
因相（種子識）――欲生

と配当することができる。この三相においては自相が根本である。自相とは自我の相、自我意識の相、自覚の相、『唯識論』の言葉によって云えば、自の体相である。したがって、自相すなわち信楽は、宗教的体験の自相である、体験としての根本意識自体たる法蔵菩薩の自体相、法蔵菩薩の自我相、自覚相である。そして果相すなわち至心は、宗教的体験の果相であり、因相すなわち欲生は、宗教的体験の因相である。

これは『如来表現の範疇としての三心観』のごく概略でありますが、先生独自の思想を了解させていただくためには反復して精読すべき大切な論著であると思います。

さて米寿記念の『法蔵菩薩』におきまして、阿頼耶識は真の我であり、純粋な自己である、清沢先生が自己とは何ぞやと言われる「あの自己である」とおっしゃっています。そしてまた満九十歳の頌寿記念の講演、「如来あっての信か、信あっての如来か」というこのテーマは、清沢先生から問われている問題であるとお述べになり、この筆録が出版されるに際して先生は、清沢先生の問いに対する自らの答えを「我如来を信ずるが故に如来在ます也」と表明されましたが、この講演の始めに「一日でも忘れることのできない、わが清沢満之先生」とおっしゃっております。

九十五歳の時、名古屋の「清沢満之先生に学ぶ会」で先生は、「他力の救済」という講題で三日間お話しされました。そこで先生は、

明治時代の仏教界、ことに浄土真宗において、西本願寺では島地黙雷和上、赤松連城師、前田慧雲先生、東本願寺では南条文雄先生、村上専精先生、井上円了先生などの尊敬すべき先覚者たち、そして清沢満之先生。どの先生のお徳も功績も広大であるが、そのお仕事を建築にたとえれば、他のお方がお骨折りくださったのは主として上層建築、それに対して清沢先生は、上層建築よりも専ら基礎工事。仏教、特に浄土真宗のおみのりについての基礎工事のために一生涯を捧げられたのが「わが清沢満之先生」である。

基礎工事というのは、『大無量寿経』でいえば、因位法蔵菩薩のお仕事である。その法蔵菩薩のお仕事を一身に引き受けて、本願他力のおみのりのために一生涯を捧げられたお方は清沢先生だったといっても差し支えなかろう。(『他力の救済』)

そうしますと、清沢先生は、法蔵菩薩のお仕事を引き受けられたのでありますから、法蔵菩薩でありましょう。

法蔵菩薩を念ずる時、念ずる人も法蔵菩薩。昔の法蔵菩薩を今の身の上に感ずる。(「還相廻向」。『講義集』二)

というお言葉があります。

しかしこのような清沢先生とのお出会いはさきほど寺川先生は悪戦苦闘とおっしゃいましたが、それは、世間での人と人との、あるいは師と弟子とのいわゆる出会いとは異なる極めて稀な出来事でありました。それを先生は「疑謗の逆縁」(「自己を弁護せざる人」。『選』二)といっておられます。すでによく知られたことかと思いますが、そのあたりの経緯を辿りながら先生のお心の歩みを尋ねることにいたします。

すでに先生は二十六歳の時(明治三十三年、一九〇〇)、「弥陀及び名号の観念」(『選』一)に「清沢満之氏を初とする「無限他力説の論者、乞ふ少しく省る所あれ」、と述べ、その二年後には「明治三十四年に感謝す」などの五篇

（『選』一）、および「頑迷なる信仰論」、「旧信仰者の叫」（『燈』七―2。『論稿集』）などによって、浩々洞の精神主義を批判しておられます。

これに対して清沢先生は、「精神主義と三世」（『界』二―2。『論稿集』）を書いてお答えになりましたが、それを読んでも疑問は依然として残っている。「然し」とここで先生の眼は自分自身に向けられます。わからないのは相手の所為ではない、つまり「如来は我等に心霊的鍛錬をなさしめんが為に、猶暫らく是疑問を解釈せしめ玉はずと覚ゆ」（「旧信仰者の叫」）と述べて疑問を撤回し、清沢満之その人を、精神主義そのものをみつめながら沈思内観の生活に入られます。

そしてその翌年、明治三十六年（一九〇三）、先生は二十九歳ですが、時機純熟して、三月十八日に浩々洞に入られます。しかしその時、清沢先生はすでに郷里、大浜の西方寺へお帰りになっていて洞にはおられません。ということは、たとい清沢先生がご不在でも、曾我先生にとっての清沢先生は常に浩々洞にいらっしゃるというような、そういうなにかがおありになったのでしょうか。ご晩年の先生は、「友人に誘われましてね」と私には一言おっしゃっただけでした。

こうして先生は入洞されましたが、

今や私は先生の主観主義に転ぜねばならぬ。

と、その心底を披瀝されますのは、それから五年後（明治四十一年六月）の「我に影向したまへる先師」（『選』二）においてであります。

云何なる宿縁にや、我が尽十方の如来は遙に聖子清沢先生を降して我等の親教和上として下されたのである。嗚呼宿善は茲に開発して善知識に遭ひ奉った。

清沢満之先生の七回忌法要と記念講演会が行われたのはその翌年ですが、その時の先生の講演「自己を弁護せざる

人」によって明らかなとおり、先生は、入洞の前年（明治三十五年）すでに清沢先生に出会っておられるのであります。これについては松原祐善先生も（『松原祐善講義集』二）、また他の方々もご指摘のことですが、その二月二十四日、東京上野の精養軒で催された京浜仏教徒大懇話会でのことは、先生の精神主義観を一転させる出来事でありました。面の当りに接する清沢先生のお言葉が直に聞えてまいります。

「我々が精神主義を唱へて、諸方の高教誠に感謝の至に堪へぬことであるけれども、我々は何等をも主張するのでなく、唯自己の罪悪と無能とを懺悔して、如来の御前にひれふすばかりである、要は慚愧の表白に外ならぬ」

との御語であった。その森厳なる御面容髣髴として忘るゝことが出来ぬ。

これは先生の、清沢先生とのお出会いの表白でありますが、その時すでに先生の身には感得がある、感応道交するものがある。先生は、その身の感に動かされ促されて入洞されたのでありましょうか。しかし入洞は直ちに問題の解決ではありません。むしろ、真に問われねばならぬ信と疑の問題はいよいよ深く問われることとなったようであります。この頃「信疑論――無始の疑惑と無終の疑惑――」（『選』二）、「暴風駛雨」三六「潜在の信、潜在の疑」他（『選』四）などをお書きになっております。

ところで、驚くべきことはその五年間のご生活であります。さきに沈思内観の生活と申しましたが、真宗大学においては、仏教学における唯識学を講じ、真宗における七祖教系論を説き、そして主として『観無量寿経』に関する論文などをお書きになっておりますが、入洞の年には「『安心決定鈔』を論ず」（『選』一）を発表し、その翌年は一年にわたって「日蓮論」（『選』二）と取り組んでおられるのであります。

かねてから先生は「宗教的人格とは何か」という深い問いをお持ちになっていて、入洞の年、清沢先生ご示寂の六月には「宗教の本体は宗教的人格に在り」（「宗教的人格論」『選』一）と論じておられます。ではこの時、なぜ日蓮論か、そのあたりの思想的なことは私にはよくわかりませんが、「日蓮論」ご執筆の明治三十七年（一九〇四）の二月に

は日露戦争が勃発します。

これについては安田理深先生が、「赤表紙――つまり仏教聖典、不変の真理と、新聞――つまりその日その日の現実、人間の存在している現実が、先生の思索の唯一の資料である」（『説・月』3、取意）とおっしゃいますように、先生は、時代の動向とか社会の思想に鋭敏であり、また人の心の機微に深く通ずるすぐれた才智をお持ちであったということが思われます。

当時の思想界、仏教界には、田中智学の日蓮論や高山樗牛（ちょぎゅう）の「日蓮聖人と日本国」などの主張があり、その法華経による日蓮主義を注視せねばならぬということがあって、それが宗教的人格論の展開として日蓮論に凝集していったのでしょうか。その日蓮論はまず、日蓮と親鸞を問題として、「上行（じょうぎょう）の化現としての日蓮と如来の化現としての親鸞」をテーマとして論ずることから始まります。この先生における日蓮論の究明は、今後に残された大切な課題の一つであるといえましょう。

このようにして入洞後の五年を過され、「我に影向したまへる先師」の告白に至り、そして清沢先生の七回忌をお迎えすることになったのであります。

それから僅か二年の後（明治四十四年、一九一一）、真宗大学は再び京都へ移転することになりました。そのことを先生は金子先生へのお便り（『両眼人』）に、「昨日は遂に暴悪なる移西案（九月実行）は可決と相成り申候　此にて母校は死し申候　此に付き私共も永く御暇を賜はることと相成候」と認（したた）めておられますが、これで母校は死んだと意を決して、その年の十月、郷里の越後へお帰りになりました。そしてそれから大正の初期五年間の田舎寺での研究生活が始まります。

しかし昨日までは東京の大学の教授、そして今は養父母に仕える役僧同然の身分です。

雪の中に旧き生活を営める流人には新年の感なし　今や賀状を受けて忽然春光を拝す　感謝何ぞ堪へん　小弟は大兄の清高なる行動に対して深く自ら慚愧するものに候（『両眼人』）

これは金子先生からの賀状に対する一月三日付のお返事です。ご帰郷後の新生活は、このようにして始まりました。その後間もなく浩々洞の暁烏敏先生宛に帰郷報告の便りをお書きになりました。「自分は昨年十月四日に　いよ〳〵郷里北越の一野僧となり終りた」、

自分は時々　全く往来杜絶せる原野の中央に、唯一人蒙々たる大吹雪と戦ひつつ進む所の自己を発見する時、悲絶の感に打たるゝ。自分を顧みれば全身多く雪に包まれ、雪を吹ひ、雪を吹く所の一箇の怪物である。此時　我は宗教家たるを忘れ、学生たることを忘れ、国家社会を忘るゝ。而して遂に人間たることも忘るゝ。自分は此時唯一箇の野獣に過ぎぬ。此時は如来も忘れる、祖師も、師友も忘れる。嗚呼　自分は従来　口には愚痴と云ひ悪人と云ふと雖ども、心には慥に堂々たる宗教家、一箇深玄の思想家を以て、密に自負しつゝをるものである。口には一肉塊と卑謙しつゝ、心には如来に依りて活きつゝあると自任しつゝあるものである。然るに今　大吹雪の中に発見せられたる自己は　唯一箇驚くべき物力に過ぎぬ。自分は年三十八歳、始めて、自ら白雪を呼吸する食雪鬼なるに驚いた。（「食雪鬼、米搗男、新兵」、『界』一二―3）

先生は「雪を食う鬼」といわれます。しかし鬼は鬼でも食肉鬼ではない、白雪を呼吸する食雪鬼であるといわれるのです。そしてこの年、『願生偈』の著者であり『唯識三十頌』の作者である天親菩薩を論じて、

彼は生死巌頭に立ちつゝ、一切皆空無人空曠の世界に孤独黒闇の真我に接触した。此真我をば、阿頼耶識と名くる。此阿頼耶識は理想の自我でなく、最も深痛なる現実の自我である。（「我等が久遠の宗教」。『選』二）

とお述べになっています。ここに、これより七年前、「如来我に在り、浄土娑婆に在り」といわれたお言葉が思い起されます（「我等東方に退却せし也」。『選』二）。そしてこの論文の発表される頃（明治四十五年七月発行）、先生は高田の金

子先生宅を、続いて加賀の暁烏先生宅をお訪ねになり、その時そこで「顕隠の教訓」を受けられ（『両眼人』）、それをさっそく『暴風駛雨』（『選』四）に発表されました。

○　如来は我也　我は如来を汝と呼ぶに止まらず、如来を直に我と呼ぶ。（乃至）我等は「如来は我也」の妙旨に驚くと共に、「我は畢竟我にして如来に非ず」と自覚す。

○　仏心凡心一体の幽旨を問はれて　今夏東北の道友と加賀に会せし時、談偶々　仏凡一体の教旨に及ぶ。余は「如来は我也」の一句を以す。道友は是れ余りに概念的なればと云はれければ、「如来は我となりて我を救ひ給ふ」と書きて贈りぬ。

○　法蔵比丘の降誕は如来の人間化也　（乃至）久遠の如来が衆生救済の為めに因位の一比丘法蔵とならせられたは、正しく人間を救はんが為めには　先づ救はるべき迷悶の人間の精神生活を実験せんが為めに外ならぬ。否　法蔵比丘の出現は　正に如来が人間精神の究竟の実験である。此実験が本願である。（乃至）誠に法蔵比丘の出現は　此れ久遠の如来と我等人間との同一生命を証明し給ふ。（「暴風駛雨」）

然らば法蔵比丘は決して遠く過去の人ではない。又遙なる浄土の人ではない。彼は近き現在の自己の主観にある。法蔵出現の如来の本願を念ずる時　その信念と念仏とは是れ法蔵比丘にて在ますのである。（「久遠の仏心の開顕者としての現在の法蔵比丘」、『選』二）

このような内観の歴程を経て「地上の救主―法蔵菩薩出現の意義―」（『選』二）が発表されますが、その時先生は三十九歳、入洞されてから満十年の歩みであります。その論文で、

あり体に白状すれば、法蔵菩薩の御名は私が久しい間、もてあまして居った所の大なる概念でありました。

とおっしゃっています。なんと赤裸裸な告白でありましょう。このうぶなお人柄に人びとは原始人、自然人を感ずるのでしょうか。

法蔵菩薩とは云何なる御方であるか。法蔵菩薩は決して一(ひとり)の史上の人として出現し給ひたのではない。彼は直接に我々人間の心想中に誕生し給ひたのである。

法蔵菩薩とは何ぞや。他でない、如来を念ずる所の帰命の信念の主体がそれである。(「地上の救主」)

先生のお言葉は生きています、生きた血が流れています。だから、どこを切り取ってきてもピチピチと躍動しています。それは、安田理深先生がおっしゃるように「人間の底知れぬ深みから出てくる」言葉、「いかなるものをも感動せしめずにはおかぬところの」(『選・月』6)生きた言葉であります。

法蔵菩薩は孤独の如来である。古往今来、生死大海に自己を投じた御方は唯一人ではない乎(か)。又法蔵菩薩は孤独の自我である。古来如来の大誓願海に自己を投じたものは唯我一人である。

法蔵菩薩は如来がわたくしに生命を与へられた姿である。而して又わたくしが如来に身命を捧げたる姿である。親しくわれを呼ぶ如来が法蔵菩薩である。親しく如来を呼ぶ我が法蔵菩薩である。(「原始の如来」、『選』三)

大正五年(一九一六)十月、先生は「遂に意を決して」(『両眼人』)上京されました。京都に移られた金子先生に代って『精神界』の編集を担当するためで、その時、東洋大学の教授にご就任になりました。東京での最初のお仕事は、すでに空洞と化した浩々洞の解散でした。これで「浩々洞と云ふ家は永久になくなるので、何とも云へぬ程胸がすっとしました、小生は最早洞と云ふ家には居らぬのである　浩々洞は各自の主観の外にはないのである　我々は今後益々浩々洞魂を発揮して進まねばならぬのである」。(『両眼人』)

そして先生は直ちに『精神界』の新しい出発に際しての願い「告白」と、論文「祖聖を憶ひつゝ」(『選』三)を書き、同時に郷里のお父様に手紙を認められました。その年の八月六日、お母様が逝去なさっております。

御父上様よ　段々に寒くなります　東京は是(これ)から寒くても天気がよいのでありますが　国は直(じき)に「アラレ」や雪

がふるでありましょう　何卒御大事になさりませ　何卒御腹に御力を込めて御念仏を唱へさせ給へ　御さびしいことでありましょう　御不自由御察し申しますが　恐れながら御開山様の御晩年も云何に御さびしいことでせう只御念仏に依り　念仏を親とし念仏を妻とし念仏を子とし念仏を友として此念仏の方々につゝまれて　真実のにぎにぎしさで御一生をすごさせられました　父上様　量深は不孝の者であります　何卒御許しを願ひます（以下略）（大正五年十一月四日付封書。浄恩寺蔵）

その翌年、先生は「遙にわが母校の学生諸子に」と、慈愛にみちた豊かな内容の大論文「大自然の胸に」（『選』三）をお書きくださいました。

それ何の為めに一切の祖先は自己を此世界に発遣したまふや。静に此自己の出世の大使命を内観せねばならぬ。（乃至）

我々の往相は常に還相に依りて裏付けられる。還相は教である。一如法界等流の言教である。大自然の第二の表現、方便的表現の教、我々は是教を身にして誕生した。我々は生れながらにして深重の業の所有者である。我は単なる、赤裸裸でない。わが霊は未生以上に深重なる言教を全身に沁みて生れた。我は如来の大願業力が此肉体の一毛孔にも充ち満てることを思ふ。噫闇の業報よ、而して闇にかゞやける宿業よ。我の肉体は是れ現在の法蔵菩薩である。法身説法の道場である。我は小なる意識に依りて自己を制限すれども、肉体は是れ大なる我である。

我は我が肉体を内観して、原始人、自然人、種族人、十方衆生を見る。肉的生身が現実の根本自我である。此肉身に無始以来の祖先の言教がある。我々の一挙一動悉く無意識なる言教の所発でないか。無始以来の生類の歴史は我の自然の言教である。祖先の内的経験は悉く皆網羅して我の無意識の言教である。我は専ら此厳粛深重なる言教に発遣せられねばならぬ。

先生の文章は詩であります。だから、詩を読むように読みますと、わかるとかわからぬとかではない、なにかしら言いようのない深い感動を覚えます。法蔵菩薩のことをお述べになった「名号の世界」(『選』三)の一節を拝読します。

未だ地上に湧出しない所の自然人、而して大自然を憶念する時に、何時でも誕生の声を挙げて、我を呼ぶ所の彼、それは現在の地上に誕生すると共に直に未来永遠の理想の故郷に往生し去る所の彼、私はそれを観入する時に、始めて自己の久遠の現実の顔に接するのである。あゝなつかしきわが還相の法蔵菩薩よ、汝は我である。汝こそは我の久遠の現実相である。我は唯汝を見ることに依りて、我自らを見る。汝は救はれたる我である。救はるべき我の姿である。

この東京でのご生活は約八年間ですが、その時の論著は後に『救済と自証』(論集第一巻)、『内観の法蔵』(論集第四巻の前半)、『暴風駛雨』(論集別巻)として刊行されました。金子先生宛のお手紙(『両眼人』)も、この期間中のものが百十一通も残されていて、思想的教学的な問題に関するもの、当時の宗門や大学に関するものなど、大切なことが記されてあります。

「新聞に由るに真大(真宗大谷大学)から英文の雑誌(The Eastern Buddhist)が出ることは何よりの事と思ふ　佐々木(月樵)氏の Philosophical Foundations of Shin Sect(真宗の哲学的基礎)の一文あることでありますが　題を思ふだけでも(勿論外国語を知らぬ私には読むことは出来ませぬ)感激の念が起ります」とも書いておられますが、また「〇生活の不安」として、

特に弱い大兄や小生には堪へられませぬ　私の食ふ米は一升五十銭です　此頃外米を少々混ぜて食べます　三四日水にひやかしてまぜてたけば臭もしませぬ　何かの経験です。

というお便りもあります。大学の講義、『精神界』、後には『見真』の論文の執筆と編集、東京大学での研究会の講師などをなさりながら、病弱の奥様に代って炊事も洗濯も掃除もなさったのでしょうか。先生のお仕事は思想的には法

蔵菩薩の物語りの非神話化ですが、日日のご生活は煩悩具足の凡夫の実践であったといえましょう。論文（「法蔵菩薩影現の歴程としての三願」）には次のようにあります。

われ等はこの肉体に依って自然の招喚の声を聞く。自然は肉体に依りて我々を招喚する。我々が肉体を受けた時に如来の救済の事業は成就したのである。我等の誕生は如来の本願成就の証明である。

奥様は不治の病（癌）のため久しく床に臥しておられました。それが重態になられましたので、大正十三年（一九二四）六月、東京での生活と別れ、奥様を伴って帰郷されました。

しかし、先生をぜひ大谷大学へ招こうという先生方がおられて、いろいろ曲折がありましたが、翌年四月、大谷大学教授にご就任になり、以後、京都に居を定められて、あらためて新しく「親鸞」顕彰の道をお歩みくださることになりました。その時、先生は五十一歳ですが、それからの四十六年、九十七歳でご西帰なさいますまでの後半生も、まことに波瀾にみちた歳月でありました。しかし、その間も終始変らぬのは、仏教―ことに浄土真宗の祖聖・親鸞、真宗再興の祖・蓮如、真宗再々興の先師・清沢満之先生に値遇することのできた謝念であり、その責任感と使命感でありました。

さて、私に与えられた時間はもうなくなろうとしております。そこで、いま念頭に浮びます先生のお言葉のいくつかを列挙させていただくことにいたします。

法蔵菩薩は阿頼耶識である。阿頼耶識は純粋な自己である。純粋な自己は相対有限である。

この相対有限の自己（すなわち機）を深く信ずること、これを「機の深信」という。機の深信とは、相対有限の自己（すなわち宿業の自身）を深く信知することである。

宿業の自身（すなわち機）は、人間の理知分別で知ることはできない。機の自覚主体は法蔵菩薩である。法蔵菩

薩は、一切衆生の罪と悩みを我が身に引き受けて宿業を感ずる主体である。

機の深信とは、自己自身の宿業を存知することのできない理知分別の無効を知ること、自力の無効を深く信知することである。このとき我々は、はじめて生身（なまみ）の法蔵菩薩を感じ、法蔵魂にめざめる。法蔵魂とは「南無阿弥陀仏」である。この法蔵魂にめざめるところに法蔵菩薩が誕生する。したがって法蔵菩薩は無数におられる、世界中に充ち満ちておられるのである。

法蔵菩薩は宿業の身の自覚主体である。

宿業は個人的なものではない。宿業の身に一切有情を感覚し、国土を感覚する、一切との血の繋がりを感覚するのである。血の本は国土である、山河大地である。山河大地は全的自我（すなわち阿頼耶識）の現実的肉体である。

宿業は本能である。知るということは生れて後に知るのであるが、本能は本来（すなわち本（もと）より）すでに与えられている能力である。

本能は感覚である、純粋感覚である。純粋感覚は自覚である。

我々は、我が身に大自然を感ずる、日月星辰、山河大地、草木国土を感ずる、親を子を友を、そして自己を感ずる。感覚の世界は、外にあっては広大無辺、内にあっては深広無涯底である。

宿業本能は感覚であり、感覚は感応道交する。感応道交に我執はない。

知ることのみしか知らぬのは我執であるが、我執を捨てて（自力無効と深信して）無我に帰れば、「真智は無知なり……無知のゆえによく知らざることなし」（『論註』）である。

真智は感にある。はからいを捨てて感の本源に帰り、知の無効を知ったときの驚きと喜びは「真智は無知なり」である。無知を自覚せしめた真智であるから、無知は、内面的にはよく知らざることなしである。（「体験の教証」、〈『選』三〉。『歎異抄聴記』、〈『選』六〉。『法蔵菩薩』、〈『選』一二〉。「仏教の世界観」、〈『講義集』四〉。他。取意）

最後にもう一言申させていただきます。それはご西帰の迫ったある日のことです。ご気分がよろしかったのか、床に上半身を起して庭の景色を眺めておられました。私は、倒れられないように背後から手を添えて支えていました。すると小さな声で何か独り言をいっておられます。耳を近づけますと「ナゾです」と聞えます。「これから（この姿勢から）三歳の童子が立って歩くのは何でもないことでしょう。けれども、この爺（じい）（九十七歳）は、どうしたらもう一度自分の足で立って歩けるようになるのか、わかりません、謎です」と自問自答しておられるのです。

毎日、お見舞いの人が沢山来られますが、中には「またお元気になって」「以前のように全国をご巡錫（じゅんしゃく）ください、皆が待っています」などと言われる人もあります。先生は、無邪気な自然人・本能人でありますから、そのような要望に何とか応（こた）えようとなさったのでしょう。

病いが重くもう起きられない状態になられてからも、ご子息の信雄様に愛用のステッキを所望されて、それを握りながら「勉強して、運動して、勉強して」と何回も何回も繰り返されるのでした。「法蔵菩薩は永遠の青年である」というお言葉が思い合わされることであります。「どうしたらもう一度」という問いも、この身のいのちの限りを尽して自信教人信の仏道を実践しようとされる先生の願心表白であり願力の歩みであったと申せましょう。

平沢興先生は先生の体を診（み）られて、「お年は九十歳でも、お体は六十歳」と言われましたが、その丈夫な体も一度崩れたバランスを回復することは容易ではありません。最後の二ヶ月ほどは床擦れも皮膚が爛（ただ）れるという程度じゃありません、骨も見えるかと思われるほどでした。だから、それが羽根布団であったとしても針の筵に寝るに等しいわけです。しかし先生は、その激痛に耐えながら「法蔵菩薩の永劫修行のご苦労を憶えば、こんな苦しみは万分の一にも及びません」とおっしゃいました。

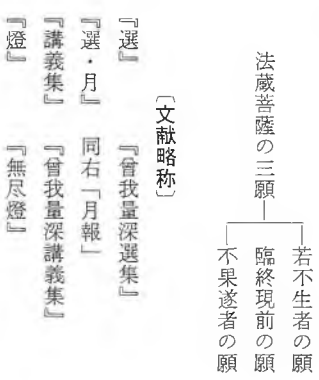
さてもうお別れの時間がまいりました。甚だ粗雑なことでございましたが、どうかお恕しくださいませ。ではこれで失礼させていただきます。

（本稿は一九九三・一〇・一五の講演の筆録に加筆したものである。一九九四・五・六、了）

注

① 画には〈12, 1962 K. Takamitsu〉とサインがある。なお還暦記念の肖像画も高光画伯による。一九四一年一〇月完成。曾我家蔵。

②



〔文献略称〕

『選』　『曾我量深選集』　『界』　『精神界』
『選・月』　同右「月報」　『論稿集』　『宗教の死活問題』
『講義集』　『曾我量深講義集』　『説・月』　『曾我量深説教集』「月報」
『燈』　『無尽燈』　『論集』　『曾我量深論集』